

『デザイン科学研究』創刊にあたって

『デザイン科学研究』編集委員長
立命館大学経営学部教授
八重 檉 文

立命館大学デザイン科学研究センターは、「新しい学術体系」（日本学術会議，2003）にて検討された，17世紀に確立した近代科学における「あるものの探求」としての存在論・認識論・方法論（いわゆる「認識科学（cognition science）」の枠組み）の実社会での限界に対する、「あるべきものの探求」としての存在論・認識論・方法論を検討する「デザイン科学（design science）」の社会的な確立と実践を目指し，2013年4月に設立されました。

本研究センターはこの構想に基づき，これまでに主として産官学地コミュニティの創造と協働を通じて，持続可能社会のあるべき姿を様々な視点からデザインすることを目的としたプロジェクトの社会的実践とその学術的意義の検討を進めてきました。

このたび創刊する立命館大学デザイン科学研究センター紀要『デザイン科学研究』は，その経験，成果，意義をより広く社会的に発信し，より深く多様な議論を行うことを目指しています。これは，これまで本研究センターが行ってきたプロジェクト中心型の活動に対して，ディスコースを付加する活動形態への発展的な移行（Krippendorff, 2005）とも捉えられます。

このディスコース形成によって参加者の議論が活性化され可能になるのは，単に本研究コミュニティが正当化されることで社会的地位が確立されるだけではなく，その境界を自らが常に引き直すことができるようになることです。つまり，組織的な省察の実践（Schön, 1983）が可能になることが最大の利点であり，このディスコースを私たちが得ることによって，その利点を活かしたさらなる本研究領域の拡充と有用な実践知の生成が期待できます。

よって，本紀要では，研究対象や研究パラダイムを問わず，「あるべきものの探求」としての存在論・認識論・方法論を根源的・野心的に検討しようとする「デザイン科学」に関わる広く多様な学術研究や社会実践報告の投稿を歓迎します。特にその執筆には，多様な属性（研究者，学生，ビジネスパーソン，社会実践者など）や協業形態（異なる専門性を持った研究者・学生，研究者とビジネスパーソン・社会実践者などによる多種多様な組み合わせの共同実践成果）を期待し，多元的（pluriversal）なディスコース形成を目指していきたいと思います。

同時に，「デザイン科学」の発展を積極的に議論するためには，継続して従来の「認識科学」の枠組みにおける発展的・批判的な検討も欠かせないものと考えます。この意味で，本紀要が従来の「認識科学」の枠組みによる研究および社会実践に関する投稿を妨げるものではありません。

本紀要が「デザイン科学」を鍵概念に、これからの学術研究や社会实践のあり方自体を広く深く議論できるようなディスコースとして、これから広く・長く活用されていくことを望んでいます。

【参考文献】

- Krippendorff, K. (2005). *The Semantic Turn: A New Foundation for Design*. CRC Press. (小林昭世・西澤弘行・川間哲夫・氏家良樹・國澤好衛・小口裕史・蓮池公威 (訳) (2009) 『意味論的転回－デザインの新しい基礎理論』 エスアイビーアクセス)
- Schön, D.A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books. (柳沢晶一・三輪健二 (訳) (2007) 『省察的实践家とは何か－プロフェッショナルの行為と思考』 鳳書房)
- 日本学術会議 (2003) 「新しい学術体系－社会のための学術と文理の融合－」 日本学術会議 運営委員会 附置新しい学術体系委員会.